

メンタルヘルス通信

<第51号>2016年9月1日

香川県教育委員会事務局健康福利課

保護者参加のケース会

今年のオリンピックは、日本選手の逆転勝ちが目立ちました。日本人は競り合いに弱いと言われますが勝負強さが光りました。プレッシャーを受けながらも実力を発揮するメンタルの強さが印象的でした。いつの時代でも年配者は若者を批判しがちですが、今回は彼らから「逆転の発想」を学ばなければと思います。

学校は世代交代が迫っています。ベテラン教員の経験知を若い世代にどのように伝えるかは重要課題です。その具体策のひとつに校内ケース会が考えられます。筆者は様々な立場でケース会にかかわっていますが、中でも保護者参加のケース会が効果的だと考えています。

小学生の不登校事例（架空）を紹介します。

小2男児。4月は普通に登校していたが5月の連休明けから突然休みだした。新採の担任が家庭訪問に出かけると母親から「先生は大声で怒鳴る、子どもは怖がっている」と言われた。確かに騒がしかったので大声で注意したが、クラス全体に向けてであり、その男児を注意したものではなかった。数日後、母親が学校に来て「担任を変えてほしい」と校長に直訴した。母親の担任不信は根強く、連日の電話攻撃で担任も精神的に追い込まれていた。校長はケース会を開催。メンバーは担任、教育相談（養護教諭）、校長、教頭、スクールカウンセラー。不登校の背景、家庭状況を理解しながらケースの見立てを行い、「次の一手」を考えてひとつひとつ実践した。しかし、母親の担任不信は日増しに強くなるばかりであった。

打開策として母親のケース会参加を打診し、消極的ながらも了承を得た。母親から家庭の様子が語られた。父親は単身赴任で子育てにかかわっていないこと。弟（3歳）が生まれてから、男児に赤ちゃん返りがみられること。母親自身の子育て不安など。そのような中で毎日のように家庭訪問してくれる担任に不満をぶつけていたが内心は感謝していたことが明らかになってきた。ケースの見立ては「母子分離不安」。担任の言動が不登校の原因ではないことをメンバー間で確認。母親は誰よりも担任を信頼し、頼っていることが分かってきた。母親は担任に素直な感情を向けるようになり、攻撃的な言動は影を潜めた。一方、男児は遠足や運動会などの行事にはときおり参加するが、不登校は半年経過後も続いている。



不登校ケースは保護者と学校の協力関係を作ることが解決の第一歩であろう。その具体策としての保護者参加のケース会は有力なアプローチと考えます。さらに、ケース会はベテラン教員の経験知を若手教員に伝える場であると同時にメンタル面のサポートにも繋がると思う。

（臨床心理士 廣田邦義）